

13氏に名誉教授称号記



小島直元経済学部教授 (21年)	奥村輝夫元商学部教授 (35年)
常行敏夫元経済学部教授 (37年7カ月)	奥村紀夫元商学部教授 (37年)
神長百合子元法学部教授 (19年)	小野隆元文学部教授 (36年)
藤本一美元法学部教授 (18年)	小山利彦元文学部教授 (35年)
植松日子太郎元経営学部教授 (43年)	伊東洋三元ネットワーク情報学部教授 (43年)
薄田誠吾元経営学部教授 (39年)	内藤豊昭元ネットワーク情報学部教授 (34年)
大西勝明元商学部教授 (45年11カ月)	2013年12月9日逝去

博士の学位授与

専修大学から3月27日、関口功一氏に博士(歴史学)の学位が授与された。学位請求論文名は「古代『東国』の史的位階」。

野口教授の研究 セス可能な防災情報学外助成に採択 野口武悟文学部教授(情報図書館学) 首都圏の自治体を対象とした実態調査をふまえて「が公益財団法人小田急財団より2013年度研究助成に採択された。」

少年少女レスリング教室

3月16日、専修大学少年少女レスリング教室(Team Bison's 専修大学スポーツ研究所公開講座)「体力測定&ボールを使ったトレーニングを実践しよう」球技から学ぶ」が生田キャンパス第一体育館で開催された。

体力測定とボールトレで体力アップ

同教室は、2009年から始まり、本学レスリング部卒業生が地域貢献活動として幼児から小学生にレスリング指導をしている。参加者の体力測定は、3年前から客観的な視点から日々のトレーニング効果を把握する取り組みとして行われている。当日は、子どもたちと保護者を含め約60人が参加した。

体力テスト、ジュニア期に必要な基礎体力テストが実施された。測定したデータは選手や保護者へ個別にフィードバックされ、実際の練習やトレーニング計画に役立てられ、大学の研究施設を活用した取り組みが役立てられている。その後、特別プログラムのボールを使ったトレーニングが行われた。講師は李宇漢法学部助教(アトラクタ五輪・韓国サッカー代表)。李助教はこれまで少年少女レスリング教室のほか、さまざまな地域のサッカー教室で多くの子どもたちに指導を行った。

当日の参加者は、スポーツを行う心構え、意味や価値について考え、ボールを用いて相手への思いやりや競技中に協力することの重要性を学んだ。最後に保護者や子どもたちがボールを使った運動を通してスポーツの楽しさに触れた。



楽しさ実感

専修人の新しい本

ゲゼル研究 シルビオ・ゲゼルと自然的経済秩序



相田慎一著

「地域通貨」の概念を提唱したドイツ人経済学者シルビオ・ゲゼル(1862-1930)に関する研究成果をまとめた一冊。2000年、05年に行われた2つの講演の間に発表された4本の論文、補論が掲載されている。

欧米では「異端の経済学」と評されるゲゼルの経済理論と思想だが、マルクス経済学を相対化させる視点を提供するもので、この理論を日本に紹介する必要があると、著者は研究に取り組んできた。「『経済学の非常識』の強固な壁を突破した時、わが国の経済学史・経済思想史研究の『多様な道』もまた大きく拓けてくるものと確信する次第である」(はじめにより)とその意義を語る。(ばる出版・本体3500円十税) 著者(あいだ・しんいち) 経済学部教授、主な担当は経済原論。



池本正純監修

重要なビジネスモデルを12に絞り込み、その特徴を整理して最近話題の17の企業を取り上げ、ビジネスモデルの観点から分析し解説を加えているのが本書。今の時代は企業に求めるにしても、実は起業家精神が求められる。日本の産業構造が大きく転換しようとしている

からで、大企業でさえ新たなビジネスモデルを模索する必要に迫られている。いまだ満たされていないニーズとまだ活用されていない資源の発見が、新しいビジネスモデルには欠かせないが、社会の課題を解決したいという志がなければそれが見えてこないということが指摘されている。とにかくわかりやすいので、若いサラリーマンや学生にもうってつけだ。(マイナビ・本体1280円十税) 監修者(いけもと・まさみ) 経営学部教授、主な担当は企業家論。



小藤康夫著

本書は終戦から今日に至るまでの期間を対象に、わが国の生命保険会社が大量に流入する資金をどのように運用してきたかを分析している。まさに生保金融の長期分析である。(八千代出版・本体2200円十税) 著者(こふじ・やすお) 商学部教授、主な担当は金融論、金融システム。

だが、バブル崩壊後の生保危機に直面してからは、リスク管理手段といった側面も重視する運用に変わりつつある。生保の長期分析を通じて得られた結論は、まさに収益性とリスク管理という相反する二つの目的を同時に満たす資産運用となる。難しい目標であるが、生保が将来にわたって持続的に発展するための必要不可欠な条件でもある。(八千代出版・本体2200円十税)



矢澤昇治編

再審と科学鑑定 鑑定で「不可知論」は克服できる 本書は13年1月に今村め手となったのが犯行着衣とされる衣類の血痕のDNA鑑定だ。 本書は13年1月に今村法律研究室が主催したシンポジウム「再審と科学鑑定」作り上げられた冤罪を暴くの記事だ。「袴田事件」のほか「東電のL殺人事件」「名張毒ぶどう酒事件」「恵庭O.L殺人事件」「飯塚事件」の各担当弁護士が「科学鑑定」の見地から冤罪性を主張。本書では冤罪防止のための方法を打ち出している。(日本評論社・本体2400円十税) 編者(やさわ・しょうじ) 法科大学院教授、主な担当は国際民事紛争解決。

逮捕から48年、死刑確定から34年を経て、最新のDNA鑑定が再審の重い扉を開いた。1966年、静岡県清水市(当時)で一家4人が殺害された「袴田事件」。静岡地裁は3月27日、死刑が確定した袴田元被告の再審開始と異例の釈放を認めた(その後、静岡地検が即時抗告)。その決